

ヤンサの 小太郎

溝井英雄・さく ◆ 斎藤博之・え



NDC913

ヤンサの小太郎

溝井英雄

学校図書 1982 (昭和57年)

138P22cm(学図の新しい創作シリーズ)

学図の新しい創作シリーズ

ヤンサの小太郎

発行 1982年9月30日第1刷

著者 溝井英雄

画家 斎藤博之

発行者 漆原利夫

発行所 学校図書株式会社

東京都品川区北品川1-1-14

電話(03)472-2741

振替東京8-72415

〒140

印刷所 図書印刷株式会社

© Hideo Mizoi, 1982

8393-363457-1038

落丁・乱丁本はお取替えいたします

学図の新しい創作シリーズ

ヤンサの 小太郎

構井英雄・さく ◆ 斎藤博之・え



ドーンッ！

と、ふくれあがつた大王の体のはれつした。とす黒いけむり、黄色いけむりが、もうもうとふき出し、あたりいちめんに広がっていった。

(二二九ページ)

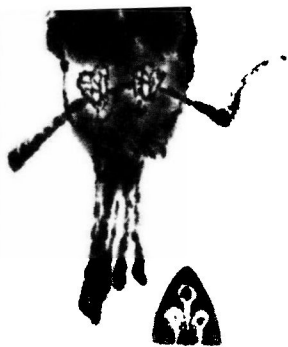




そうてい

杉浦範茂

ヤンサの小太郎

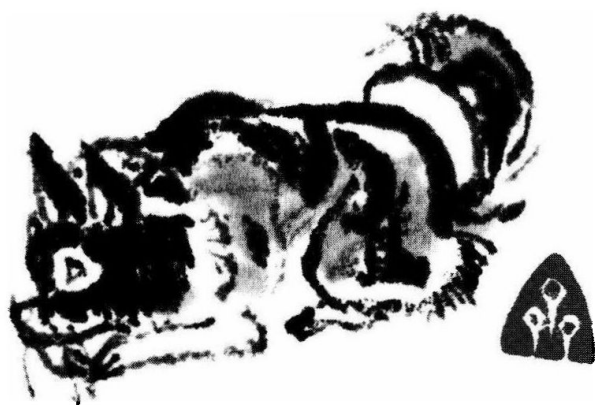


もくじ

1 ふしぎな男の子……………9

2 ゆびきりげんまんだぞ……………15

3 宝^{たから}の玉がぬすまれた……………23



4 しまった、おとし穴だ.....40

5 くまの森のくまたち.....50

6 宝の袋をとりかえす.....58

7 ほら穴の大王.....67

8 宝の玉のひみつ.....78

9 おらはにげないぞ.....91

10 大王たいじの計略.....103

11 小太郎がやられた.....114

12 あたらしい宝もの.....130

この本を読んでくださったあなたへ.....136

1…ふしぎな男の子

ヤンサの森は、山の中の大きな森だ。一ど道にまよったら、二どと出られない、ふかいふかい森だ。

ヤンサの森の入り口に、とめじいさんとばあさんの家があった。

夏のある日のこと、とめじいさんは、森の中で一人の子どもをひろった。じいさんが見つけたとき、子どもは、すっぱだかで、うす暗い森の道をてくてく歩いていてた。

子どもは小さくて、まだ話ができなかったが、首にみごとなにしきの袋ふくろをかけ、手のひらに、やっと目があいたばかりの鳥のひなをのせていた。

じいさんのおともは、犬のロクだった。ロクは耳がぴんと立ち、しっぱ

をきりりとまいた、大きな赤犬だ。ロクは、はだかの子どもを見たように、いさましくまきあげていたしっぽをたれ、じいさんのうしろにかくれてしまった。

じいさんは、首をかしげた。

「どうしたんだや？　ロク……」

じいさんは、子どもとロクを見くらべて、いった。村じゅうの犬の親分のロクが、小さくなくてもじもじしている。じいさんは、もう一ど首をかしげた。

子どもは、とがった小さなおちんちんと、大きなへそをもっていた。

「わしも、男の子がほしかったんじゃが……」

じいさんは、子どもをながめてつぶやいた。じいさんとばあさんには、子どもがいなかった。

（この子は、きつと親にはぐれた子だ。このままにはおけん、つれて



帰って、なにか食べさせてやろう。」

子どもは、なにをたずねてもにこにこしているだけで、話ができない。

じいさんは、子どもの手をひいて森を出た。ずっとはなれて、あいかわらずしっぽをたれたロクが、とことこついてきた。

じいさんとばあさんは、子どもが首にさげていた、にしきの袋ふくろをひらいて目をまるくした。

みどりもあざやかな、かがやく石の玉が出てきたのだ。玉のまわりは、内から出る光につつまれ、ぼおおっと、黄色くかがやいている。玉はとても大きなものだった。

じいさんは、ため息をついた。

「ばあさん、これはぎよくだ、宝たからの玉だ。」

「こんな宝たからもの、見たことはありませんの。」

「きっと、この子のお守りなんだよ。」

「おそろしや、ながめていると、すいこまれていくような気がしてきますの。はやくしまってください。」

じいさんは、いそいで袋ふくろの口をとじた。

「ばあさん、この宝たからものをかくそう。だれにもいってはいけないよ。この子の親が見つかったときの、しょうこの品ものだ、だいじにしまっておいてやろう。」

じいさんは、宝たからの玉をつばにおさめ、床下ゆかに穴あなをほってそこにうめた。

かくし終わると、二人はほっとため息をついた。

いく日たっても、子どもの親はあらわれなかった。どこからも、だれからも、迷子まいごをたずねる知らせは来なかった。

じいさんは、ともしんばいになってきた。といっしよに、心の中ではわくわくしていた。この子がほんとうのすて子なら、二人の子どもにすることができるかもしれない、と思ったからだ。

じいさんとばあさんは、ひろってきた子を小太郎こたろうとよんで、じぶんたちの子どものようにかわいがった。

2…ゆびきりげんまんだぞ

ヤンサの森のすぐ近くに、小さな村があった。あたりは、白いソバの花が、いちめんに咲きこぼれていた。

ソバの畑の中に、スギの木にかこまれたお宮があった。お宮の森から、子どもたちのさけび声が聞こえていた。

小太郎、おせおせ、どんとおせ。

弓太、ふんばれ、ふんばれ。

そこだ、小太郎、足かけろ。

弓太、あとがない、あとがない。